

アニミズム衰微を憂ふ

アニミズム論攷家・元駐バチカン大使 上野 景文

まつ、能登大震災で犠牲になった方に衷心より哀悼の念を表するとともに、被災された方にお見舞ひ申し上げます。

さて、六、七十年に互り好角家を自認してきたが、今日の大相撲、まま「おや？」と感じさせることがある。大相撲つて半分は「宗教」だ。各本場所直前には神事を通じカミさまに降臨したので、本場所中の土俵にはカミさまがおはす。力士が塩を撒くのは、土俵の「清・浄」を守り、カミへの崇敬を表するためだ。両手に山盛り塩を握み、これをど派手に撒くといった所作は神事にまつ。また、取組みを

終へた力士の中には、碌

にお辞儀しない者がゐる。お辞儀は、そこにおはすカミに対する儀礼であり、神事の基本だ。神事に「品格」は不可欠だ。相撲だけではない。社会全般に互り、「カミを畏れる」といふ心性が衰微しつつあるやうに見受けられる。より根本的には、神道の根源にあるアニミズムの心性が衰微しつつあるやうでもある。昨年十月に本紙に「アニミズム抜きに日本は語れない(上・下)」なる小論を発表したところ、予想を超える好感が示された。今回は、その先にある問題、つまりアニミズムの衰微につき、お話しする。なほ、念のため申し添へれば、アニミズム

は、日本文化の奥底にある心性(樹木に喩へれば「根」にあたる)であるのに対し、神道は、それが宗教にクレードアップされたもの(「幹」にあたる)といふ区別がある。

アニミズム衰微 内と外の面から

それでは、日本におけるアニミズム衰微の「黒幕」は何か? 何よりもまつ、この百五十年に互る「近代化」がその衰微を齎したといふ点を指摘したい。掘り下げれば、西洋的モダニズム(近代主義)の滲透といふ内面的変化と、都市文明の深化といふ外形的变化とがある。まつ、内面・思想面では、西洋的モダニズム、

とくに、合理主義・経済主義・科学主義が日本に滲透したことが衰微を齎したといへる。たとへばかつては、多くの工場で機械類をスクラップする前に神事が執りおこなはれてゐたが、合理主義の滲透に伴ひ、そのやうな慣習は廃れつつあるやうだ。あるいは、山林を切り開き、樹木の大量伐採をするといった、自然の大改造を伴ふ都市開発型案件が進められ、ヒジネス中心思想が強まる中で、巨樹の「お命」を頂戴することに「心を痛める」人が減つてゐる。さらに、科学との関係について、科学主義の深化した国が死者の遺体を「部品(臓器)の集合体」と見ることとは対照的に、日本では、多くの親が子供の遺体を「部品の集まり」と見るのを拒んでゐることなどから、これまで臓器移植への抵抗感が

強かつた。しかし、かかるアニミズム的の心性もいまや科学主義の攻勢にさらされてゐる。いふまでもなく、アニミズムだけではロケットは打ち上げられないの

人工的な環境で 繊細さを失つて

次いで、外形的面では、都市文明、機械文明の深化が齎した影響に着目したい。そもそも、アニミズムは、山・森・滝などの中で育つた我々の祖先が育んだ自然を畏敬する心性である。コンクリート等の建築物、人工的環境で育つた都市民の間では、あるいは、照明による真暗な夜が消失しかけてゐる都市空間で、自然を畏敬するアニミズム的の心性が稀薄になりつつあることは致し方ないのかもしれない。都市文明には、原理的にアニミズム

で、モダニズムを受容することは必要なのだが、それが進むと「カミの気配を感じる」「カミを怖れる」といった感受性、心性が衰微するといふジレンマがある。なほ、こ

と相容れない面がある。

アニミズム的にいへば、草木の一つ一つまでもが尊い「お命」を宿す。巨樹はもとより、巨岩・聖山・瀑布をも愛でるアニミズムが、都市化の進行する中で、「居場所を狭められて」ゐることに、寂しさといふか、ある種の喪失感を感じる。元来、自然を畏敬する日本人の感性は、静寂を尊び、自然のかすかな変化(気配)にも心を動かす。超一級の繊細さだ。然るに、日本の現状はいへば、都市部を筆頭にTV(バラエティショー等々)であれ、街であれ、騒音・雑音が溢れ、自然

の伝統主義とモダニズムの相剋といふ図式は、キリスト教保守派が、中絶やLGBTなどの問題でモダニズム派の攻勢を受けてゐる米国をはじめ、多数の国で見られる。

「離れ業」今後も

もつとも、アニミズムを脅かすものは近代化・都市化だけではない。経済界・政界の一部で「法」軽視が見られることが次々と報じられてゐるが、これなど、近代化以前から存在した古典的事案といへる。それらは、アニミズム的にいへば、

えねども風の音にぞおどろかれぬる」と詠じたこのアニミズム的といへる静謐さ、繊細さが、さらに損なはれないか、心配だ。

「カミ」をも怖れぬ行為

であり、神道が尊ぶ「清浄な氣」を「濁らす」行為といへなくない。とくに「法」に宿るカミを。「氣涸れ」は「汚れ」に通じ、放つておくと、日本に立ち込める「氣」全体が「淀む」ことになりかねない。これは、青年諸君に、元氣・勇氣・覇氣など新鮮な「氣」を吹き込んでもらひ、「淀み」を清めたいものだ。以上整理する。とくに西洋的モダニズムの受容が進む中、アニミズムを守ることは至難の業となつてゐる。ただ、振り返れば、日本は御一新以来、近代化を成し遂げつつも、アニミズム的エートスを思ひのほか維持してきた。「洋才」を取り入れつつも、「和魂」を守つてきたこの「離れ業」、今後とも続けるほかない。でないといふ、日本人のアイデンティティは消滅しかねない。

【参考】拙論「外交交渉とアニミズム」(『諸君』平成七年十月号)、拙論「現代社会とアニミズム(今なぜケルトか)」(『ケルトと日本』八角川書店、平成十二年)所収

「カミ」をも怖れぬ行為であり、神道が尊ぶ「清浄な氣」を「濁らす」行為といへなくない。とくに「法」に宿るカミを。「氣涸れ」は「汚れ」に通じ、放つておくと、日本に立ち込める「氣」全体が「淀む」ことになりかねない。これは、青年諸君に、元氣・勇氣・覇氣など新鮮な「氣」を吹き込んでもらひ、「淀み」を清めたいものだ。以上整理する。とくに西洋的モダニズムの受容が進む中、アニミズムを守ることは至難の業となつてゐる。ただ、振り返れば、日本は御一新以来、近代化を成し遂げつつも、アニミズム的エートスを思ひのほか維持してきた。「洋才」を取り入れつつも、「和魂」を守つてきたこの「離れ業」、今後とも続けるほかない。でないといふ、日本人のアイデンティティは消滅しかねない。